

## J-PAO 個別商談会「農と食の出会い」を初めて開催！！

### 当機構販売支援先7社が出展

大手百貨店・高級スーパーなど

12社のバイヤーと49組の商談

10月21日(水)  
渋谷区内で

去る10月21日(火)、東京都渋谷区内において、当機構主催の個別商談会「農と食の出会い」を初めて開催し、当機構販売支援先7社が出展、12社のバイヤーが来場しました。

今回の個別商談会の特徴は、出展者の希望や出展商品に応じた業種・業態のバイヤーを誘致し、事前にバイヤーの希望も踏まえて設定された時間割に基づき、確実に商談の機会を確保できるようにした点。

開会に先立ち、当機構高木理事長から「今日は、消費者に皆さんのような物語のある商品を提案しようとして

いるバイヤーが商談を行っている。1先との商談時間は20分と短いかもしれないが、丹精込めて作った自分の商品についてバイヤーにその感動を伝えられるように取り組んで欲しい。」と激励しました。

今回出展した7社の内訳は、北海道の肉用牛と小豆生産、関東の酪農、四国の採卵鶏と柑橘生産者、九州の野菜と柑橘生産者。どの出展者も6次産業化に取り組みしており、それぞれが自信を持つ加工品を出展。各バイヤーには事務局から事前に出展される商品の概要を提示し、商談の希望の有無を把握。それぞれの希望に基づき商談の時間を設定し、12社のバイヤーが商談を希望した出展者と1組20分間、延べ51組の商談を行いました。



誘致したバイヤーは、都内に本店を構える高級百貨店



グループ3社、大手通信販売2社、高級スーパー1社、大手コンビニエンスチェーン1社、高級料理店グループ1社、大手居酒屋チェーン1社など合計12社。

### 出展者の営農類型と出展商品

エリア	営農類型	出展商品
北海道	肉用牛	牛肉・熟成肉など
北海道	小豆	小豆を使用した菓子など
関東	酪農	バター、チーズ、牛乳など
四国	採卵鶏	鶏卵、燻製卵、味付きゆで卵など
四国	柑橘	ジャム、ピール
九州	野菜	ジュレ、ドレッシング
九州	柑橘	ジュース

開催後に参加バイヤーに行ったアンケートによると、どのバイヤーからも「満足した」「生産者と直接話ができ勉強になった。」「いい商材があった」などの感想が寄せられました。参加したバイヤーの全てが、いずれかの出展者1先以上の商談を継続中で、なかには既に成約したケースも見られます。

今回の商談会は、日本公庫が毎年夏と冬に主催している「アグリフードエキスポ」の運営事務局を請け負い、商談会の運営に豊富なノウハウを持つ当機構賛助会員のエグジビションテクノロジーズ株式会社のご協力のもと行われ、当日は多数の運営会員の皆さまにもご視察をいただきました。

当機構では、今回の商談会に対する出展者様のお声も参考に、今後の継続開催について検討していく予定です。



出展した7社の皆さんと高木理事長

## □ 専門部会の動き(10月分)

### 【事業化支援・販売支援①】

農業復興プロジェクトについては、秋まきタマネギの試験栽培の開始状況について報告を行いました。

コスト削減プロジェクトについては、集落営農の実態・課題について担当企業より説明を行い、内容について質疑応答を行いました。

最新のデータでは 14,717 団体あり増加傾向であるが、本州以南では稲作が中心で、以下の課題が共通してあるため、将来のビジョンの策定が急務であるとの意見が出されました。

- ・低迷する米価に対応する為の生産コストの削減
- ・構成員の高齢化に伴う作業員・オペレータの確保
- ・利益の再投資への計画が無い（現状は構成員に分配）

次回は、共同利用（リースなど）について説明と意見交換を行います。

### 【事業化支援・販売支援②】

J-PAO 個別商談会についての説明と、あずきの販売戦略について議論を実施しました。

J-PAO 個別商談会は、J-PAO 事務局が対応中の個別支援先を中心とする小規模な商談会を開催する取り組みで、今回が初開催となります。参加者からは、「巨大商談会との違い、一流バイヤーとじっくり話をする機会がある。商談は勿論、バイヤーの意見を自社の商品開発に取り入れることのできる場として発展させていけば企画として更に面白くなるのでは。」という意見が多く出ました。

あずきの販売戦略については、日本人のあずき離れや、あずきの素材としての汎用性の乏しさが現状の課題として挙げられ、それらを解決する方法として、例えばお菓子などライフスタイルを捉えた商品開発による 6 次化推進をしてみればどうか、また、料理教室とのタイアップによる調理方法と食文化の普及を同時に図ってみては、といった議論が交わされました。

### 【事業化支援・販売支援③】

今回は明治時代から続く酪農経営体について議論を実施しました。

この経営体は収益性が低く、生乳加工設備の老朽化も進んでいるため、収益改善をしつつ設備資金を確保することが喫緊の課題となっています。収益改善には、この経営の特徴であるジャージー牛の生乳を最大限活かし、一般の生乳と同様に飲用向けに乳販連に出荷されている生乳もなるべく自社工場加工して付加価値販売を高めることが重要となります。このためには営業強化に取急ぎ取組み、販路確保につなげる必要があるとの意見で一致しました。販売拡大には、卸売業者も活用し、特に利益率が高いソフトクリームを強化すべきとの意見等が出されました。

### 【人材育成】

前回に引き続き、企業派遣型課題解決ワークショップ研修の進め方について検討を行いました。トップマネジメントセミナーについては、以下の2つの方向性をもとに意見交換を行いました。

- ・多くの農業者が参加いただくプログラム。
- ・過去の内容（講演＋パネルディスカッション構成）の見直し。

これらを踏まえ、次回も引き続きワークショップ研修とトップマネジメントセミナーについて検討を進めます。

その他、「平成 27 年度農林水産予算概算要求」における人材育成に関する事項について報告を行いました。

## □ 主な活動(10/7～11/17)

- 10/8 第 85 回企画運営委員会
- 10/20～21 平成 26 年度アドバイザーミーティング
- 11/5 企業派遣型課題解決ワークショップ研修  
(第 1 回導入研修)(木之内会員、高田)
- 11/8～9 「第 5 回ファーマーズ & キッズ フェスタ 2014」
- 11/11 栃木県農業ビジネススクール(高田)
- 11/12 第 86 回企画運営委員会

## 往復書簡

今回からは、前島昭博氏（山口県 株式会社花の海）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡が始まります。

拝啓 高木 勇樹様

秋冷の候、高木様におかれましてはご健勝のこととお慶び申し上げます。全国に苗を生産・出荷している農場の繁忙期も折り返し地点を過ぎ、現場は落ち着きを取り戻しつつあります。

「農学業えて農業滅びる」そんな言葉にも感化されて歴史ある船方農場グループ（代表 坂本多旦）に飛び込んで、はや十八年が経ちました。当時の私は農学研究者になることを目指して大学の実験室で植物生体計測の研究を続けていました。プラスチックの精密成型を本業とする企業に籍を置き、給与をもらいながら研究を続けていた時期もありましたが、バイテクブームの終焉とともに企業は撤退しました。儲からなければ、自分の好きな研究で実績をだしても続けていくことはできないという現実をしつかりと理解できました。そして、基礎的な研究を続ける中で自分のやっていたことが社会の役に立つのか。自問自答する日々だったのです。

そうだ、自分の原点にもどって農業という産業に可能性を求めてみよう。自分は馬力もあつて手先も器用だ、植物を見る目にも自信がある。何よりも農学をずいぶんと学んできたではないか！そのような状況で「農業基盤のない青年にも農業ができる場を！」という船方総合農場の企業理念は私にピッタリだったのです。

「事業は人なり」という言葉があります。日本農業の将来を決めるのは多様な人材を農業という第一産業に取り込み、育てていく仕組みづくりにあると思います。私の同級生で農業という職業に就いた人はほとんどいません。

私の人生経験から、大学農学部という専門教育と第一産業である農業には乖離を感じています。双方が近づけば、技術立国日本における農業の可能性はもっと明るく広がっていくのではないのでしょうか。若輩者ながら自分の思いをぶつけてみました。このたびはこのような機会を与えて頂き、誠にありがとうございます。

平成二十六年十月吉日

敬具

前島 昭博（まえじま あきひろ）

一九七〇年 愛媛県温泉郡重信町（現 東温市）生まれ  
一九九五年 愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程中退  
一九九六年 山口県阿東町（現 山口市阿東）にある船方農場グループ入社  
二〇〇一年 尊農塾にて大規模園芸農場構想発表  
二〇〇三年 株式会社 花の海設立、取締役として参加  
二〇一三年 株式会社 花の海 代表取締役社長就任、現在に至る  
当社は大規模システム園芸農場における苗づくりを通して、川上から農業を支える「5次産業」「農・商連携」。そして、農業の魅力・可能性をたくさんの人へ！をモットーに、川下から農業を支える「第六次産業」「都市・農村交流」の仕組みづくりを目指しています。



上段：(株)花の海 前島社長

下段：ハウス保守・修繕の様子



拝復 前島 昭博 様

東京では十月二十八日木枯らし一号が吹き、一気に秋が深まったように感じます。今年、は年明けからこれまで随分と天変地異があった年で、残り二カ月間足らずですが、平穩無事に打過ぎることを祈るばかりです。

「花の海」と聞くと、条件反射的に坂本多旦さんの顔が思い浮かべます。ふたりに防波堤に立って、耕作されず荒廃した干拓地の茫漠たる様を見ながら、坂本さんがその再生に懸ける熱い思いとグラントデザインを語られた時のことがつい昨日のように想い出されます。

その社長さんをされている貴兄にこの世の縁を感じます。

事業は人なり、同感です。ただ一人を見抜く力」を事業トップが持つているかが大事だと思います。農業経営体は大きくなったとは言え、組織的には未熟でカリスマ・ワンマントップが多いのが現実だと思います。決断が早いので当たれば急成長ですが、失敗すれば奈落の底ということになります。

船方農場グループは早くから事業理念を明確にし、その実践のための人材（財）を集める努力とその人材個々の能力をいかに引き出し総合力とするかを組織運営の基本に据えていたからこそ、「農業基盤のない青年にも農業が出来る場を」の企業理念が自然に生まれたのではと思います。

貴兄も企業を見抜く力を持っていたのです。  
今地方創生が、女性が輝く社会の実現と並んで国政の目玉となつています。

小生は、多くの農村で基幹的な役割を果たしている農業が、産業として持続する経営を行うところこそが地方創生のひ

とつのかぎを握っていると思つています。ところが農業の産業化、持続する経営というキーワードは御社では当たり前でしょうが、霞ヶ関、永田町で市民権を得たのはつい最近のことです。

貴兄の大学と農業についての見解はその通りと思います。が、このような現状の農業と地方大学農学部が具体的にどのような近づき方をすると良いとお考えでしょうか。次回農業側の問題、制度・施策の問題などと併せお考えをお聞かせ頂ければ有難く存じます。

平成二十六年十一月吉日

敬具

## 高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ  
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。  
一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官  
二〇〇二年 ㈱農林中金総合研究所理事長  
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任  
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長  
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

